

2016年10月30日

顔と顔を合わせるとき

丸山 勉

【聖書】ヨハネによる福音書 9章1～7

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。」こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。

ヨハネによる福音書9章は、生まれつきの盲人と主イエス様の出会いが、一章全体にわたって記されています。本当でしたら全体を読むのが良いと思いますが、朗読では初めの7節迄を読んで頂きました。その後半についてもこれからの話の中では触れたいと思います。1～2節をもう一度読んでみますとこうあります。

「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

すぐ前の8章の最後の節を見ますと、イエス様が神殿の境内から出て行った、とありますから、恐らくその近くの道端にこの生まれつきの盲人は座っていたのだと思います。神殿詣でに来る者たちのわずかばかりのお恵みを受けるために毎日そこに座り込んでいたのでしょう。

それにしてもなぜ、弟子たちは、イエス様にこの様な問いをしたのでしょうか。この盲人の耳にもこの問いは聞こえたことでしょうか。残酷な問いですね。誰も好き好んで障害を背負って生まれてくる者はありません。それこそ「生まれつき」なのですから誰もが納得できる答えを見出すことは出来ません。いや、不可解であるからこそ、弟子たちは自分たちの師であるイエス様に尋ねたのでしょうか。この方だったら何か答えて下さるかも知れないと。

このことはいわゆる障害だけの問題ではないのではないのでしょうか。なぜこの世の中に、不幸な悲しみがあるのだろうか。なぜ、私はこのような境遇を生きなければならないのだろうか。なぜ、突然襲ってくる災害や事故に遭遇して昨日とは全く違うような苦しみを背負わなければならないのだろうか…。私たちもその「答え」を知り

たいと思うことがあるのではないのでしょうか。

その「答え」について、それはそのような運命なのだとか、そのような星のもとに生まれたのだとか、自分には手が負えない過去の因果が現在のことにつながっているんだとか言われることがあっても、それで何の解決にもなりません。絶望感が増すだけです。そういう人間の弱さに付け込む商売も昔から後を絶ちません。この生まれつきの盲人は、そのような「なぜ」と問うても答えが与えられないこの世界の不条理を、その身に一身に受けた代表の様な存在と言えるのではないのでしょうか。

この弟子の問いにイエス様はお答えになりました。3節です。「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。**「神のみわざが現れるため」と言います。驚くべき言葉です。でも一般に考えて、この言葉はピンとは来ないのではないのでしょうか。障害もまた個性なんだから前向きに生きていきましょう、とかだったらある意味分かり易いとも言えるでしょう。でも「神のみわざが現れるため」？…一体「神のみわざ」とは何なのでしょう？

私たちに起こる神様のわざ、それは、「信仰」ではないかと思いました。「神様の働きとしての信仰」が与えられる。それは、彼が、絶望や孤独の中にうずくまるのではなくて、イエス様の声を聴き、それにお応えして生きていくという新しい人生がここから始まるということだと思ふのです。

お読み頂いたように、このあとこの盲人は癒しを体験するのですけれども、それがゴールではありませんでした。むしろここから彼の新しい試練も始まっています。彼は物乞いをしておりましたが、両親はユダヤ人の共同体の一員であり、彼も共同体の外にいた訳ではないようです。しかし、彼はこともあろうに、目が開かれることによってファイサイ派の教師の非難を受け、その共同体の外に追い出されてしまったのです。そのような彼に、イエス様はご自身から近づかれて声をかけられたのですね。35節。「あなたは人の子を信じるか」。私はこの時、イエス様はこの人の今や開けられた「目」を見つめてお聞きになったと思います。「あなたは人の子を信じるか」。彼は答えました。きっと目の前のイエス様の目をじっと見つめてです。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが」。「信じたいのです」と彼は言いました。彼は、その心の深い所で救いを、いえ、救い主を渴望していたのですね。そしてこの後の出来事がこの物語のクライマックスです。37と38節。イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、とあります。ひざまずいた。彼はここで、イエス様を拝したのです。このお方こそ私の救い主！と。「信仰」が与えられたのです。これこそが「神のみわざ」でなくて何なのでしょう！ここに至って、彼は、きっと思ったのではないかと思います。全く意味が分からなかった「生まれつきの盲人」という存在の重荷、物乞いをしなければ生きていけないような境遇、そして、イエスに目を開けてもらったが故にかえって不条理と

も思えるような仕打ちにあったこと、本当に「神様はおられるのですか？」と問わずにおれないような連続の人生、それも皆無意味なのではなく、この方との出会いを目指していたんだ、と。私は決して孤独ではない。私の人生を誰よりも知り、共に生きていて下さるお方が確かにいらっしゃるのだ。その事を悟った彼は、もうひざまずかざるを得なかった。これからはこのイエスという方に私の人生を明け渡していこう！と。

さて、この物語のキーワードは「目」だと思います。「見る」ということです。私は準備をしながらそのことを思わせられました。この物語は、まずイエスがこの人を「見た」という所から始まっているのです。この聖書では「見かけられた」と訳されていますが、むしろ「目を注いだ」或いは「認めた」と訳しても間違いではない言葉です。そこには強い意志と愛が込められているのだと思います。旧約聖書には、神様はイスラエルの民を「ご自身の瞳のようにも守られた」という箇所がありますが、日本語でもこんな言い方がありますよね。「目の中に入れても痛くない」と。イエス様は、本当にこの人を目の中に入れてしまったのではないかと、思います。必ずこの人を救う！と。イエス様はこの盲人を、憐れみの心に満ち、わざと言葉でお癒しになりました。ご自分の唾を用い、土をこねてこの人の目に触れました。彼はイエス様の温かな手のぬくもりを感じたと思います。そしてそれだけでなく、シロアムの池で洗いなさい、と命じられました。彼はそのお言葉に従いました。命じられたイエス様の言葉の力が、彼を今までの生活に留まらせなかったのです。同じヨハネ福音書の5章に、「床を取り上げて歩け」と命じられた38年間病の床にあった病人が、そこに座り込むことをやめて立ち上がって行ったように、彼も盲人のままの姿で、シロアムの池に歩き出したのです。道端に座ることをやめて床を取り上げたのです。そして、彼は目が見えるようになった。驚くべき奇蹟です。ファリサイ派の人たちが、32節で「生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません」と証言するほど、これは驚天動地の出来事だったんです。ある牧師は『盲人の癒し・死人の復活』というタイトルの、ヨハネ福音書にちなんだ説教集を出されましたが、ヨハネ福音書の丁度真ん中ほどに位置する二つの奇蹟物語、これこそがイエス様が神の子として私たちの所に来て下さったその代表的な徴なのではないかと、と仰っています。本当にそうではないかと思えます。

「目が開かれる」ということ。これは旧約聖書の預言とも深くかかわるものです。例えば、イザヤ書42：6～7には「主であるわたしはあなたを立てた。見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出すために」とあります。他にもありますが、盲人の目が開かれるというのは、神の国の到来のしるしなのです。そしてそれをもたらして下さったお方こそ、正に主イエスです。イエス様ご自身も、マタイ11：4～5でそのことを言っておられます。救い

は主イエス様の到来と共に確かに始まりました。そうです。新しい時代が既に始まっているのです！

生まれつき身に負わされている障害が、本人か誰かの罪の結果なのかという、因果応報的な、差別につながる思想をイエス様は斥け、断ち切られました。そして、ここで主は私たちに問うているのではないのでしょうか。「では本当にあなたたちは見えているのか」と。私たちも皆「生まれつきの盲人」なのだと思います。本当に見なければならないものを見ていない。見えていない。41節で、イエス様がファリサイ派の人たちに言われている通りです。本当は見えていないのに、「今『見える』とあなたたちは言っている。だからあなたたちの罪は残る」。イエス様は深い次元で「罪」を問うているのです。ここでのファリサイ派の人は他人事ではないでしょう。私たちの心の中は、いつだって自分を安全地帯に置いて、異質と思える存在を排除しようとする心があります。この世の中の基準はこうなのだからと言って、それを正しい物差しのようにしてその基準に合わないような者を非難し、糾弾します。私たちの目には丸太が入っているのに、あなたの目のおが屑を取らせて下さいと言う傲慢があるのです。なぜそんなに人は高ぶるのでしょうか？そうしないと、自分を支えられないからではないのでしょうか。「だからあなたたちの罪は残る」。人を裁く心は、人を抹殺する心です。実は私たちのこの心が、神の子イエス様を十字架へと追いやりました。私たちの心はそんな闇を、罪を抱えています。しかし、イエス様は、人間の罪にご自分をお任せになったのです！自ら進んで受難と十字架の死を身に受けられたのです。罪人である私たちに神の赦しを与えるためにご自分の命をお捨てになったのです。驚くべき不条理ではないのでしょうか！そして「わが神、わが神、なにゆえ私を見捨てられるのですか」と父なる神に叫ばれました。私たちが神の前に叫ぶべき叫びに身代わって、です！この、不条理を一身に引き受けられた主だけが、私たちの人生の不条理の中に分け入ることが出来るお方です。そうであれば、私たちが今出来ることは、この盲人が目を開かれてイエス様の前にひざまずいたように、私たちもイエス様の前にひざまずくことです。「主よ、憐れんで下さい」と。目が開かれるということは、自分が神がかかることではありません。「神ってる」なんておかしい言葉少し流行りましたけれども、そうではなく、目が開かれることは、自分の罪が分るという事と表裏一体です。

この盲人は確かに特別な体験をしました。イエス様に目を開けて頂いて、その「目」で直接イエス様の御顔を、イエス様の目を見たのです。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」「主よ、信じます」。このやり取りをしている時の「目」と「目」が合う感覚。ちょっと想像してみたいと思うのです。イエス様の慈しみに満ちた眼差しがあって、そしてそれに彼の信頼に満ちた眼差しが応えている。こんなにも近く愛なるイエス様と顔と顔を合わせる体験できた彼が

羨ましいとさえ思います。けれども、これは、やがて来たる神の国における私たちとイエス様の出会いの雛形ではないでしょうか？完全な愛の交わりです。私はこの間の水曜日（10/26）に誕生日を迎えました。もう57年間も生きてきました。皆さんは、ご自分の誕生の時のことを覚えていますか？自分では覚えていませんよね。けれど、恐らく私たちが母の胎から生まれ出た時、まず愛いっぱい母親の眼差しを受けてこの地上に送り出されたのではないのでしょうか！その子も少し経つと、母親の注ぐ目を真直ぐに見つめ返すようになります。赤ちゃんは目を逸らしませんね。怖いほどです。しかし、大きくなると私たちは人とじっと目を合わせる事が本当に少なくなりますね。でも、誰かにプロポーズする時はそうではないでしょうか？背中を向けてはプロポーズ出来ません。はにかみながらもじっと相手の目を見ます。愛を伝えたいからです。愛に応えてほしいからです。私たちの与えられている目も、私は、究極的にはイエス様とまみえるために与えられていると思います。私たちが神の国に迎えられた、地上でのあらゆる障害は取り除かれているでしょう。私たちの地上の涙をことごとく拭い取って下さるお方がそこにはおられます。私たちは皆、主イエスに「目をとめて」頂いた存在です。主に目を注いで頂いた者は、その主に背を向けることは出来ません。主イエスの目を見つめ返す者となるのです。

今私たちは、この肉眼でイエス様を拝する、ということは叶いません。けれども、この地上で始まったイエス様との信頼に満ちた愛の交わり、それが完成する時がやってきます。完全に目が開かれる時がやってきます。今、私たちが個々の教会で礼拝を捧げているこの地上の礼拝は、やがて私たちが経験するその天上の礼拝を先取りしているものです。小さな交わりであったとしても、とてつもなく大きな天の礼拝のひな型であることは間違いありません！そこでは、今日招きの聖句で朗読して頂いたあのヨブ記42：5の言葉が実現するでしょう。

「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」。その日を、この地上にあって楽しみにしたいと思います。罪赦され、イエスを信じるという霊的な目を開けて頂いた者として、私たちは様々な人生の道のりをこれからも歩まされる訳ですが、その一步一步を主イエスと共に、そして教会の仲間と支え合いながら、安心して、主にお委ねして生きていきたいと思ひます。

お祈り致します。

主なる神様、御子イエス様と生まれつきの盲人との出会いを、主と今の私たちの出会いの物語として聴かせて頂きました。ここにあなたの溢れるご愛を見、それを受け取らせて頂けることを感謝申し上げます。主は十字架の上で私たちの罪も、苦しみも、不条理も、自らのものとしてお引き受け下さいました。このようなお方は、ただあなただけです。そしてあなたは、今、私たち一人ひとりに御目を注いで下さい。あなたとの関係の中に引きずり込んで下さい。どうかそのあなたの眼

差しをしかと受け止め、わたしたちもあなたを見つめ、あなたに応え、揺るがない希望の中で、あなたの証し人として生きていくことができますように。使徒パウロが「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」（ローマ 8:12）と、確信を持って生きていったように、私たちもそのような天から指し込む光の中に安心して歩みます。主よ、どうかお遣わし下さい。聖霊によって導いて下さい。主イエス様の御名によってお祈り致します。アーメン。